

Peshawar-kai

ペシャワール会報

ペシャワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.110

2011年12月13日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 集う人々／画・甲斐大策

人と和し、自然と和すことは武力に勝る力

中村 哲

日本のことが少し見えるようになった

村上 楽

洪水を経験、事の重大さ理解

村井光義

PMSに勤務して15年が経ちました

ジア・ウル・ラフマン

17年間さまざまな部署で働いてきました

ヌール・モハマド

●ワーカーOB近況報告 大地と共に生きる人々の強さを思い出します

山口敦史

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

人と和し、自然と和すことは 武力に勝る力

——平和とは理念でなく、生死の問題

PMS（平和医療団日本）総院長／ペシャワール会現地代表 中村 哲

河との激闘の日々

みなさん、お元気でしょうか。つかの間の帰国でしたが、再び河との激闘の日々です。

嬉しいことに、これまでPMS（平和医療団日本）が手がけた取水堰・用水路らの灌漑事業が、少しずつ各方面の支持を得るようになり、「自分の村にも」という陳情が殺到しています。

新たに着手したベスード第一取水堰工事は、去る一〇月三〇日に事実上開通、多くの人が喜びをかみしめました。これによって、農地約二千数百ヘクタールの安定した灌漑が保障され、約一〇万人の農民が洪水と渇水に怯えなくて済むようになるからです。

近年の気候変動で河川の水位差が極端に変動し、従来の取水方式ではもう対処しきれず、多くの地域で耕地の沙漠化が進んでいることは再々お伝えした通りです。

かつて一〇〇パーセントに近い食糧自給を

誇っていた農業国は、壊滅的な打撃を受け、今や食糧の半分を外国に頼っています。アフガン人にとって、この数字は絶望的です。殆どが自給自足に近い農民と遊牧民の国で、食糧自給が半分ということは、人口の半分（約一千万人）の生存する空間が失われたということです。このままではアフガニスタンは、

戦争ではなく干ばつによって滅びるでしょう。

日本に伝わるのは戦争や政治の話題ばかりで、この大きな厄災が伝わらぬもどかしさがあります。PMSとしては、全力をあげて対処し、過去十年間、医療と並行して灌漑事業に取り組んできました。この結果、ナンガラハル州北部農村地帯、ベスード、カマ、シェイワの三つの郡（耕地計一万四千ヘクタール）で農民六十万人の生活を守ろうとしています。計画が完全に成ると、このモデルが更



州副知事や灌漑省役人が現場を訪れ、ベスード第1取水口施設着工式が行なわれた

に拡がり、東部アフガン農村の多くが救われることも、決して夢ではなくなります。「人間と自然との同居」は、ここでは死活問題です。

とは言っても、私たちが相手にするインダス河の支流はあまりに巨大で、まだまだ力不足を感じています。

自然の理に従う

ベスード第一取水堰と同時に、カマ郡対岸



ジャリババ溪谷洪水通過路（A地区用水路を横切る）の拡張工事。水を流しながら作業を進める。旧通過路の幅14mを35mに拡張。109号の掲載写真と同じ場所



10月30日ベスード第I水路に通水。作業員も、祝いの菓子をほお張りながら、感慨一入。取水門からの主幹水路約170m下流にある沈砂池にて



通水後のベスード第1取水門。田畑に水を流しながらの水門上部工事

の護岸工事三・五キロメートルが今冬に完成します。護岸は一年二ヶ月に及ぶ大工事になりましたが、ベスード郡の三分の一、約千ヘクタールの安全が守られます。これには石出し水制、かすみ堤など、日本の伝統治水技術が大活躍し、見事に大河の激流を制しました。「自然は征服が不可能で、人が自然の理に従い、与えられた恵みを見出す努力をすべきだ」という優れた自然観が、その根底にあります。実際、水路や護岸沿いに植えられた柳

並木は壮観で、道行く人は足を止めて美しさに見とれ、心を和ませます。

先日、甲府の武田信玄の治水事業にふれる機会に恵まれました。筑後川の山田堰と同じく、数百年の時を超えて、胸に迫るものがありました。先人たちの知恵と努力、幾多の試行錯誤、自然との関わり方——営々と築かれてきた成果の延長線上に、私たちの存在があることを改めて知りました。そこで育まれてきた自然観や文化、人の温もり、助け合い、

美しい国土が、深く関っています。それは「経済成長」やお金の多寡では、決して計れない尊いものです。

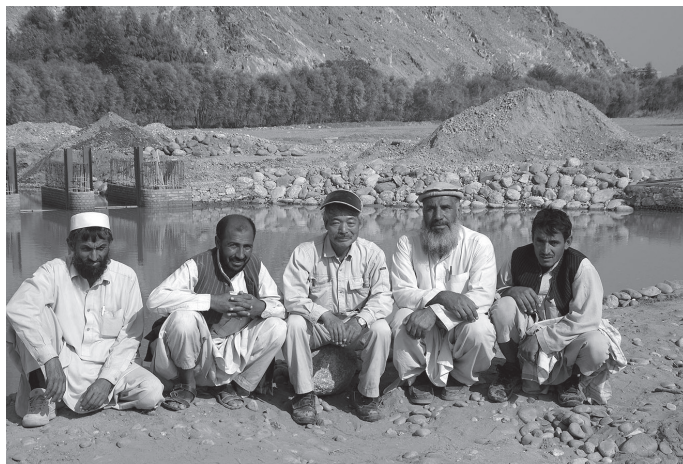
砂嵐にむけ植樹大攻勢

一方、ガンベリ沙漠の開拓は、休むことなく続けられています。今秋の突然の集中豪雨は、マルワリード用水路を一時途絶えさせ、忘れかけていた沙漠化の恐怖を思い起こさせました。こちらの方は、超突貫工事で二週間

で復旧して開通、現在洪水通過路の拡張工事が続けられています。

五月の砂嵐で壊滅した試験農場は、並々ならぬ努力で復活し、三五ヘクタールで小麦の作付けが行われました。来年の目標は、単なる量産ではなく、サツマイモの普及、アルファルファの野草化、果樹園の造成、養蜂の試みなど、バラエティに富んで楽しいものになっています。

しかし、砂嵐対策が最大の仕事で、今冬は



10月30日ベスード第I水路に通水後、中村医師と主なメンバー達

植樹大攻勢。防風林を倍增し、水やりのための給水塔を建設、灌水路を張り巡らせています。

かつて忌避された死の荒野が豊かな草地を生み、遊牧の群が続々と集まっています。この光景の中に「平和」があります。

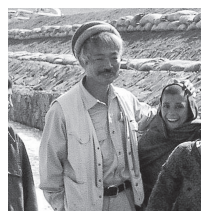
人と和し、自然と和すことは、武力に勝る力です。だがそれは、戦争以上に忍耐と努力が要るでしょう。実際、一〇年間鍛えぬいてきたわが作業員・職員六〇〇名は、気力と技術において、どんな軍勢にも勝る実戦部隊です。平和とは理念ではなく、ここでは生死の問題です。

寒風に震え、飢餓に直面する人々が求めるのは、猛々しい戦でも、気の利いた政治論でもありません。

近頃、「そんな危ない所なぜ」と、よく尋ねられます。PMSは、何も好んで国外で冒険をしているわけではありません。一〇〇パーセントの安全は、何もしないことです。火を暗ければこそ明かりを灯し、寒ければこそ火をたく価値があります。今を置いて、いつ「助け」があるでしょう。

みなさんの変わらぬご理解に感謝し、この事業を継続すべく、いっそうのご支援を心からお願ひ申し上げます。

良いクリスマスと正月をお迎え下さい。



中村哲：九州大学医学部卒。

専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病

院勤務を経て、一九八四年パキスタン・パクトウンクワ州（旧北西辺境州）の州都ペシャワールに赴任。以来二八年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧困層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も開始した。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレージの復旧。作業地千六百ヶ所以上）事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手し、一〇年三月全長二五・五キロが開通した。年間診療数約四万五千人（二〇一〇年度）。

◎ワーカー通信

日本のことが少し 見えるようになった

PMSジャラバード事務所・医師

村上 楽^が

医務室からスタート

日本の皆様、師走の日々いかがお過ごしでしょうか。

この一〇月よりPMSジャラバード事務所に赴任した医師の村上楽と申します。去る一〇月一九日、事務所内の一室に、現地職員とその家族を対象とした医務室を開設いたしました。医務室といってもアフガン人職員が一〇〇名以上、ひと家族一〇名として、ざっと千人程度の人口圏の医療機関というつもりでいます。現在は内服薬しかありませんが、今後は更にマラリアや結核の診断のための染色検査、また外傷のための小外科の機能も持つべく準備をしていきます。

少々勇ましく書きましたが、実のところ始まって以来、受診者は一日に一人程でまだ閑古鳥が鳴いています。これは職員が健康なの

だと肯定的に評価すべきなのでしょう。まだ今のところ職員家族の受診はありません。

本来ならばPMSが長年運営しているダラエヌール診療所で、現地の医師と共に働けるのが一番なのですが、治安の問題から今のところ見合わせています。この「医務室」に本来にニーズがあるのか、医療が本当に必要な人に届けられるのか等々、疑問がわくこともあります。しかし医療の需要が供給を圧倒的に上回っているアフガニスタンですから、ここで着実な仕事をしていると、やがて患者さんは増えてくるだろうと今のところ楽観的にみています。

学生の時代のアフガニスタン

新米ワーカーとして少しだけ自己紹介を書きます。私は九州で生まれ育ちました。私の父が以前ベシャワール会の事務局長をつとめていたことなどから、PMSは小さい頃より馴染みがありました。大学在学中、タリバン時代のアフガニスタンでPMSの井戸掘りをみて感銘をうけ、いつか現地ワーカーとして働きたいと思っていました。医師免許取得後、福岡と徳之島の徳洲会病院で約五年勤務し、その後タイのマヒドン大学熱帯医学校で勉強

してから今回ここに来ています。

雑務も庶務も、すべて自分で

まだアフガン生活が始まったばかりのためか、私は日本での生活や仕事のことをよく考えてしまっています。現金なもので、電気や上下水道、信号やゴミ収集などのインフラが無い状況になって初めてその存在を意識しています。また医務室で、薬の調達、診療録の管理、医療廃棄物の処理、医療器具の洗浄と滅菌な



村上楽医師（左）学生時代しばしば現地訪問していた頃

ど、日本では他の職種の方々がされていたことを、当面は現地職員の手を借りつつも主に自分でしています。日本では病院がどのように運営されているのか思い至ることもなく、ひたすら「病氣」のことだけに目を向けて私は働いていたのだと自覚しました。それは仕組みを作った先人達と、様々な関係者の皆さんのお膳立てがあったからこそできていたのでした。アフガニスタンに来て、なぜか日本のことが以前より見えるようになったような

洪水を経験、 事の重大さ理解

PMS ジャララバード事務所・会計担当

村井光義

通水のリミット目前に、休日・夜間も作業

一〇月初旬、洪水を初めて見た。それは前夜に降った雨による増水に加え、上流にあるダムの放流によって起きたそうだ。ほんの少し前に私が立っていた場所には、水が流れていた。一メートルも水位が上昇すると、中洲として見えていた所も全て水で覆われ、河の流れる幅は二倍以上になっていた。洪水につ

気持ちがしています。

しかし、私の今の職場はここジャララバード。時間はかかりますが、アフガンの土地と習慣になれ、言葉を覚え、早く現地の人たちの役に立つような仕事ができるように精進していきます。

最後にここアフガニスタンで働く機会を与えてくださった日本の支援者の皆様にお礼を申し上げますとともに、これまで通りの変わらぬご支援のほどよろしくお願いします。

いては話や写真で見聞きしていたが、実際に目の当たりにすると、考えていたよりも恐ろしい河の姿があった。

一〇月下旬、今冬の大きな工事の一つであるベスード第一取水施設工事が山場を迎えていた頃、再び雨が降り洪水が発生した。その雨は四日間続き、普段は嬉しい雨雲を恨めしく思い、気がでない日々であった。

洪水が現場に流れ込むと工事が数カ月遅れる。正直に言うと、以前は当事者としての意識が欠けていて、事の重大さを理解できなかったが、最近の写真と映像を使った工事の説明を中村先生から聞き、少しずつ状況を呑みこめるようになってきた。

長い間、水路工事に携わっている職員の気持ちは当然同じで、イード（犠牲祭）前に通水することが確認されて突貫工事に入り、休



ねぎの栽培（ガンベリ試験農場）

日返上、時には照明を準備し夜間も作業を続けた。

総力を結集し資材調達

事務所では資機材手配はもとより、十分な数の堰板調達が優先事項となった。

堰板は業者に木材・鉄板・鉤^{かぎ}の加工を依頼し、事務所の作業場で接合する。木材を選び、堰板同士を重ねる時に隙間ができないように、丁寧に切断する。併行して鉄板を切り、鉤を

2012年カレンダー

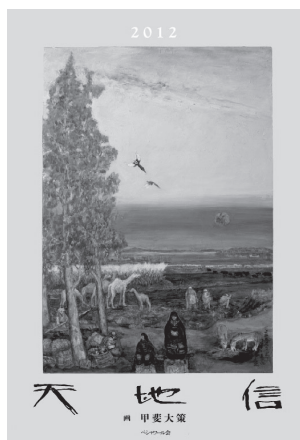
「天・地・信」

画・甲斐大策

お早めにご注文ください

A2判変型(画・7点)

定価:1500円(税、送料込み)



今年も恒例のカレンダーを販売しています。
部数には限りがありますので、同封のハガキで
お早めにご注文ください(ご友人・知人の方々
へのプレゼントも承ります)。

溶接、ボルトを通す穴をあける。錆び止めと塗料を塗り、木材と鉄板をボルトで接合し仕上げる。

作業は職員である自動車修理工(自動車や重機の修理をはじめ、配管工事、電気工事、太陽光発電装置の設置、パネルのフレーム作成など何でも自作する)が行なったが、運転手、門衛、事務職員も各々の仕事を調整し手伝った。

一〇月末日、通水の日を迎えた。冬の作付けに十分な水が、幅広く取った主幹水路を下った。数日後、水が流れる様子を見たときは、目まぐるしく過ぎた十日間の雑感が吹き飛ぶ

ほどの喜びを感じ、その場に立ち会えることを有難く思った。

河の水位が下がる河川工事に適した時間は限られている。現場は広範囲に拡がり、ベスード第一取水施設も水が通ったとは言え、上部施工や河回りの工事が残っている。

事務所としては、現場と連絡を取り合い状況を把握し、工事が円滑に進むように、一助力を合わせて取り組みたい。

最後になりましたが、PMSの活動を支援して下さる皆さま、活動に携わる機会を与えて下さる方々に、心より感謝申し上げます。

サファル・バヘル! (良い旅を)

ドバイからの帰郷 甲斐大策

便乗してきたトラックがコハト峠の頂上で停った。スール・アフマドは路肩に歩き、夕陽を吸った赤い塵埃が包むコハトの街を見下ろした。運転手と他の便乗者達は夕べの折りに立つ。

街外れ、タマリスクの叢林をへだて、赤土の平屋根を連ねるアリヘル族難民の集落が見えた。キャンプAである。夕餉を支度する煙が昇る。

アフマドがこの風景を眺めるのは十三年ぶりだった。視界のすべてが涙に揺らぐ。

十日前ドバイからカラチへ船で戻ったアフマドは、港近くの雑貨屋へ直行した。ペシャワールでアリヘル村民の出稼ぎを仕切る親方ハジ・バフットの連絡先である。携帯電話と紙片を差し出しながら雑貨屋は、長いこと御苦労だったなア、といった。

「電話、奥さんにも渡してある。これ、番号。クリフトン・ビーチの貝細工でも土産にどうか。バスは明朝だし。これ、足代。」

港両側の海岸は草一本ない荒地だった。

数棟の建売別荘と華簾張りの土産物屋が唐突に並び、客待ちの五匹頭の駱駝が坐りこんで同じ方向を見ている。その視線の先、赤錆びた巨大な破船が舳先を天に向け、海中からそそり立っていた。干潮で抜がった砂浜には、無数の渡り蟹の死骸が散り、五〇℃近い暑熱に悪臭を漂わせる。足下で潰れた蟹は更に濃密な悪臭を放った。大洪水の痕を残すシンド、パンジヤブからパシュトゥンの土地へ北上千数百キロ、五日目にアフマドはペシャワールへ入った。

毎年一度、密出入国同然に夫婦の逢う瀬をカラチに手配してくれた礼をいうアフマドに親方は、それも仕事だよ、と笑った。

コハトの霊廟前で家族達が出迎える。アフマドは、樹木がなくとも何十種もの野生のハーブが香るアリヘル村の夏を想い、キャンプを引き払っての帰郷を決めていた。

PMSに勤務して十五年が経ちました

—医療・井戸・灌漑・農業・モスク……

PMSジャララバード事務所総責任者・PMS副院長 ジア・ウル・ラフマン

私、ジア・ウル・ラフマンは一九九六年からPMSジャパンのペシャワール基地病院で副院長として働き、二〇〇八年六月からは、ジャララバード事務所長として勤務してきました。簡略ながら、私たちの活動報告を送ります。

PMSジャパンは日本の人々の寄付によって活動を支えられており、医療と灌漑部門においてアフガニスタン東部で困窮する人々のために活動が続けています。

(1) 医療

PMSは外来・検査室・薬局・ワクチンプログラムを有するダラエヌール診療所で活動しており、一日一五〇〜二〇〇人の外来患者を診察している。患者の大半は女性と子供で、ダラエヌール住民のために二四時間診療している。

(2) 井戸プロジェクト

アフガニスタン東部が深刻な旱魃に見舞われた二〇〇〇年に井戸プロジェクトが開始さ

れ、一六〇〇本を超す井戸をソルフロッド、ロダット、アチン、ダラエヌール、ジャララバード各地に掘削。またパキスタンとの国境の町トルハムにも四本の井戸を掘削した。さらに給水ポンプと発電機を備えた直径約五メートルの灌漑用井戸を十三本建設し、さらにダラエヌールでは三八本のカレーズを再建した。これらはナンガラハル州住民を大いに助けた。

(3) 灌漑

二〇〇三年に用水路プロジェクトを開始、あと少しの作業を残し建設作業は完了している。本水路はジャリババからガンベリ沙漠までの全長二五・五キロで、三五〇〇ヘクタールの土地を灌漑している。

(4) 農業

二〇〇九年本水路全長開通と同時に、PMSは農業プロジェクトを、再び渇水に陥りつつあるダラエヌールからガンベリ地区に移した。州政府が私たちのパイロット事業用に一

一〇〇ジェリブ（二二〇ヘクタール）の土地を供与してくれたものの砂地であったため、砂の除去作業を開始。これまで二〇〇ジェリブ（四〇ヘクタール）を完了。同時に、緑肥・堆肥を使った完全有機農法を試みながら、農作物の生産増加をめざして準備が進んでいる。

(5) シエイワ取水口

シエイワ住民援助の一環として二〇〇七年十一月に着工し、二〇〇八年三月に完了。住民およそ六万人が同事業の恩恵に浴した。

(6) カマ第一取水口

二〇〇八年一二月に着工し、二〇〇九年二月に完了。人口約八四〇〇人の三つの大村落と七〇〇ヘクタールの土地を灌漑した。

(7) カマ第二取水口

二〇〇九年一二月に準備工事開始。二〇一〇年一〇月から本工事に入った。主な工事は完了し、あとは小規模な作業を残すのみとなっている。五二村落に灌漑用水を提供する。本事業はナンガラハル州住民にとって極めて大きな恩恵をもたらした。第一と併せて、耕地七千ヘクタールが潤され、約三〇万人が暮らせるようになった。

(8) ベスード護岸

二〇一〇年一〇月にスタート。一五四〇ヘクタールの土地とおよそ三三〇〇戸の住民がクナール川の洪水から守られた。

(9) ベスード取水口

本プロジェクトは二〇一一年一〇月に本工事が開始され、十万人を超える住民が恩恵に浴している。

(10) その他

PMSは七〇〇人収容のモスクを併設した

マドラサ（神学校）を建設。十四教室と貧しい子供たち向けの寄宿舎も併設している。上記に述べたプロジェクトは全て中村医師が指揮監督し、他の事務的作業はPMS委員会が管理している。

十七年間さまざまな部署で働いてきました

PMSジャララバード事務所職員 ノール・モハマド

私はダウド・モハマドの息子でノール・モハマドと申します。

私は一九九四年一月二〇日から現在までPMSに勤務しており、これまで様々な部署で働いてきました。最初の五年間はベシャワールの基地病院で看護師をし、それから事務員となり、二〇〇八年一〇月二七日にアフガニスタンのジャララバード事務所へ転勤となり、事務職として勤務を続行しています。

私の職務は以下の通りです。

- (1) 購買・現場作業員数の管理・PMSの重機車両への燃料配給
- (2) 作業員日勤表・燃料週間報告・現場が依頼した物資の運送等

(3) 物品出納日報作成

(4) 現場作業員への日当支払い

私は、日本の皆さんからの援助を本当に嬉しく思っており、我々アフガン人への皆様の支援にお礼を申し上げます。

ナンガラハル州住民全員が、マルワリード用水路、シェイワ取水口、カマ取水口I・II、カブル河側のベスード取水施設工事、クナール河側のベスード護岸工事、ガンベリ地区での農業プロジェクト、さらにはダラエヌール診療所やこれまで同州各郡で実施されたPMSジャパンの全てのプロジェクトに感謝しています。

有り難うございました。

▼ 寄附をしてくださる皆さまへ ▼

* 当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承ください。承頂きますよう、お願いいたします。

▼ 郵便払込票の記入は分かりやすく ▼

* ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼ 未使用の切手、ハガキを！ ▼

* 会報の発送等の通信費に、年間数百万円がかかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

* 一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

▼ 郵送方法の変更について ▼

* 一部地域の方々へは発送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

●ワーカーOB近況報告

大地と共に生きる 人々の強さを思い出します

元・灌漑水路建設・農業担当

山口敦史

那須疎水とマルワリード用水路

ペシャワール会の会員の皆様、ご無沙汰失礼しております。元現地ワーカーの山口敦史と申します。三月十一日の震災で被災された方、いまだなお困難な中におられる方の平安をお祈り申し上げます。

月日の流れは早いものでして、帰国してからもう三年半経とうとしています。先週より那須連峰の頂きは白い雪を抱えはじめ、アフガンの荒涼とした風景を縁取るようにして映える白い山々が非常に懐かしく思われます。同じように、ここにも那須の山々を水源とする川から取水して、那須の野原に引かれた用水路があります。百年ほど前から活かしている用水路ではありますが、今や生活用水から農業用水まで人々の生活の中に根付いているがために、ここに用水路の歴史があるとは思えない景色が広がっています。きつと、アフガン東部の用水路も年々改修され、人々の生命線

としてきつとつかそのような存在になっていくのではないでしょうか。

その那須疎水には、現在、自動開閉完全制御型の赤い取水口が取り付けられています。が、その取水口の横には明治、昭和時代に使用われていた取水口が遺跡として残され、時代とともに改修工事が行われてきた軌跡を感じることが出来ます。最近のペシャワール会報では、度々取水口の改修の報告を伺うことが出来ます。その工事はいつも自然のニーズに沿って行われ、人々の流した汗の結晶のように見えてきます。明治時代に作られたという那須疎水の取水口の姿は、なんとマルワリード用水路の取水口の姿と酷似し、人々が自然の中で用水路と寄り添って生活してきた情景が浮かんできます。

植樹担当として奮闘

さて、現地での赴任中は、植樹、用水路コンクリート構造物施工、農業担当と多くの仕事に関わりを持たせていただきました。幾年か経った用水路脇に生い茂った柳並木の写真を見ると、「わー」と思わずその情景の奇跡的な変化に感嘆の声をあげてしまっています。

私が赴任してすぐに所属したのが植樹班でした。主な仕事は、用水路の生命線ともいえるべき用水路護岸の木々の水やりの管理から用水路進捗にあわせての植樹でした。現地の言

葉一つわからず、現地スタッフに「言葉が喋れない奴」とあは呼ばわりされたり、よくおちよくられたり、夏の猛暑にふらふらになりながら、水やりを行っていました。現地の事情になれない初めの三ヶ月は、本当に大変だったという記憶しかありません。作業現場によつては、日雇いの作業員が勤務中に木影で気持ちよさそうに寝ている場面に出会うこともあり、全身でぶつかりあいながら何とか木を枯らすまいと懸命に働いていました。

現地農民の技術に驚き

その後は、コンクリート構造物の施工を担当しました。用水路には緩やかな傾斜が必要であるために、水ホース等で水平を図りながら床面工事を進めていきます。しかし、多くのアフガン人は鋭い目をもっていました。正確な傾斜は用水路の存続にかかります。そのような傾斜をいとも簡単に自分の感覚を使いながら決めていくのです。

もちろん、何度も水平機を使いながら確認を行います。が、ことごとく彼らが決めた位置と合うのは驚きました。現場では石工も必要とされていましたが、現地では家や田畑の垣など、家族みんなで力を合わせて造っている。ので、ほとんどの農民は、優れた石工でもありました。

現地の家は、石・粘土・藁など地域にある

材料だけで造られ、より人と大地に近い存在です。マイホームが人生の夢で、一生の買い物とされる日本との違いを感じます。

何よりも驚いたのは、日々用水路の工事が進み灌漑できる面積が増えていつていっている時でした。水がその土地まで来たとなれば、一夜にして畑の水平を図り畔をつくり畑まで水を引き、種を落とし、二週間後には大地が緑に変わっていききました。

このようにアフガンで過ごした日々というのは、その大地にしがみ付いて生きる百姓の強さを感じたことだったのでしよう。

当り前でなくなった「日常」



現地職員たちと山口さん

日本に帰国後、縁があり栃木県のアジア学院というところで農業に関わる仕事をさせてもらうことになりました。多くの時間を土との触れ合いのために割き、白い山々を見上げた時は、どこか、アフガンに在るかのような感覚を覚えます。

しかし、残念ながら三月十一日以降は生活が一変しました。未だに何か映画を見ているようです。映画であればいいのという思いがまだまだ心の奥底に眠っているのでしょうか。私の住まいと職場のある那須地方は震度6強という強い揺れのために、大地が割れ建物がゆがみました。そして、放射性汚染物質が飛んできました。

妻と子は実家に帰り、家族そろってご飯を食べることができなくなっていました。一緒に故郷で三度の飯を食べる」というそれまでの日常が特別な日になり、それがいかに大切であるかを感じずにはいられませんでした。自らこのような災いを引

き込んでしまった私たち。アフガンで、この三度の飯のために共に汗を流し、その重要性を理解してきたと思っていたのですが、実は「人ごと」だったのかもしれない。アフガンでは難民となつて隣国へ避難できる人はまだマシな方だとよく中村先生がおっしゃっていたのを思い出します。その土地でしか生きていけない人こそ、力添えが必要であると。妻と子が離れ、一人になった自分はふとその言葉を思い出してしまいました。

いつの間にか、時間を見つけては福島被災地に足を運ぶ日々が始まりました。そして、多くのペシャワール会員や関係者の方々から励ましの声をいただきました。元ワーカーの西山さん、荒野さんは遥か関西方面からボランティアにかけつけてくださいました。非常に嬉しく思い、この場を借りてお礼申し上げます。

アフガン、日本の情勢には不透明なところが多く、先行き不安だらけです。しかし、このような時にこそいつも誰かが傍にいてくれる、そのような存在を感じることがいかに生きる活力になるかを痛感しました。

これからはアフガンで起こっていること、福島をはじめ被災地で起こっていることを、他人事としてではなく、自分のこととして、人々と寄り添いながら考えていけたらと思います。

●事務局便り

＊八月の断食月（ラマダン）に続き、十一月のイード（犠牲祭）期間中に帰国した中村医師は、五ヶ所ほど講演を行い現地へ。報告によると今秋最大の工事だったベスードの取水口も目処がついたとのことである。春にはガンベリの試験農場を砂嵐が襲い、夏には集中豪雨でマルワリード用水路が決壊と次々と試験に見舞われたが、現地は忍耐強く克服してきた。ただカマ取水口やベスード護岸の保全工事も同時に進行し、対岸のカシコート村との和解のあとの工事も控えている。そのすべての進行が中村医師の双肩に懸っている。日本側も、皆様と共に全力で支えたい。

＊今年の夏から二〇一四年までに米軍がアフガニスタンから撤退ということで、治安がさらに悪化している。先月二六日には国際治安支援部隊（ISAF）のヘリが国境を越えパキスタン軍を誤爆、二四人の兵士が死亡した。これまでも無人機攻撃による非戦闘員（民衆）の犠牲は、日常的で膨大な数にのぼっている。アメリカ国内に目を向けると昨年一年間だけで、アフガニスタン・イラクからの帰還米兵の自殺者は六千人を越えたという。これは戦争での米兵の死者数とほぼ同数である。「ウォール街占拠」にみられるだけでなく、アメリカの病はさらに深まっている。

＊先日ラジオを聞いていると、経済学の教授が今の大学生は生まれてこのかた経済成長を知らないんです、とそれが不幸であるかのように嘆いていた。またこれは

少し前の話だが、あるロック歌手が「パプルのときのようになろうよ」と、昔を懐かしんでいた。リーマン・ショックから三年経ち、相変わらず「経済成長至上主義」という蟻地獄で、もがくような日々が続いている。二〇一一年は、格差問題、就職難、老後問題等「不安」が渦巻くなかでの大震災に原発事故と、私たちが当たり前としてきた何物かが切断される年となった。来年がまたもや年になるためには、「経済至上主義」という桎梏から少しでも自由にならねばと思うのですが。

②村から

二〇一〇年福岡で開催された写真展で、受付のお手伝をしたのがきっかけで、事務局でボランティアをしています。以前より、事務局ではより多くの方々にペシワール会を知っていただくために、今日までのペシワール会の現地活動の様子を、写真展より狭いスペースでも展示可能なA3サイズのパネルで作成しております。私は写真をプリント・ラミネートしたりキャプションを考えたり、そしてパネル展を開催して下さる方に発送したりと現地班のアドバースを受けながら手伝っております。私にも本当にできることがあるのか、事務局にドキドキしながら訪ねた最初の日、帰り際に「今日はどうもありがとう。また来てね。」とやさしく見送ってくださった先輩方の中で「一円でも多く現地に送ろう。」を心に、微力ながらお手伝いさせていただいております。（S・O）

医者、用水路を拓く

アフガンの大地から世界の虚構に挑む

中村哲 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録 【3刷】1890円

辺境で診る辺境から見る

【3刷】1890円

医者 井戸を掘る

【10刷】1890円

医は国境を越えて

【6刷】2100円

ダラエヌールへの道

【重版・5刷】2100円

ペシャワールにて

【8刷】1890円

アフガン 高橋修・編著
農業支援奮闘記

農業計画6年余の失敗と成功を記した貴重な記録【新刊】2500円

聖愚者 大策甲斐の物語

1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24
電話092(714)4838人は愛するに足り、
真心は信ずるに足る

アフガンとの約束

中村哲／澤地久枝（聞き手）

1995円

岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
電話03(5210)4000

価格はすべて税込価格(税5%)です

会 則

- ① 本会の名称をペシワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦ 本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧ 毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAHOUSE（千八〇一〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇一二五 上村第二ビル六〇三号TEL〇九二七三一一一三三七二）内に置く。